

# アムスルだより

No.40 1999年11月11日

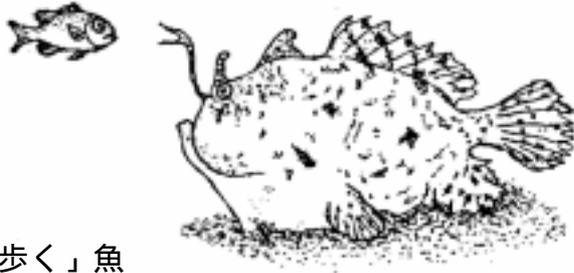
Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/pb3/saburo>

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



「歩く」魚

-イザリウオの仲間-

魚は、「泳ぐもの」とふつう考えますが、ふだんは泳ぎ回らずに、岩かげなどでじっとしているものも意外に多いものです。たとえば、カサゴやオコゼの仲間は、あまり泳ぐことなく、岩場や砂地でじっとしています。ただし、これらの魚も、そのほとんどは移動するときには、やっぱりヒレを使って泳ぎます。日本には2000種ほどの魚がいるのですが、その中には変わった動き方をする仲間がいます。今回は、この仲間についてお話ししましょう。

名前は、イザリウオといいます。みなさんも、一度は聞いたことがあるのではないのでしょうか。なにせ、魚の中でも変わり者なので、テレビや本などでもよくお目にかかります。見たことのない人のために説明すると、ずんぐりむっくりした体つきで、その表面にははっきりしたウロコはなく、とても小さなとげがはえているか、それすらなくすべすべしているかです。口は、すねたように上向きのへの字口で、小さいけれどつぶらな目と相まって、とても愛きょうのある顔をしています。

日本で見つかったイザリウオ科の仲間は12種いますが、イザリウオモドキ、イザリウオ、ハナオコゼの3つのグループに分けることができます。イザリウオモドキは、日本では今から6年前の1993年に沖縄よりちょっと北の奄美大島で初めて見つかったという新しい種で、2回目はその2年後の1995年に宮古諸島で見つかっていますから、間にはさまれた慶良間列島にも、すんでいるかもしれません。

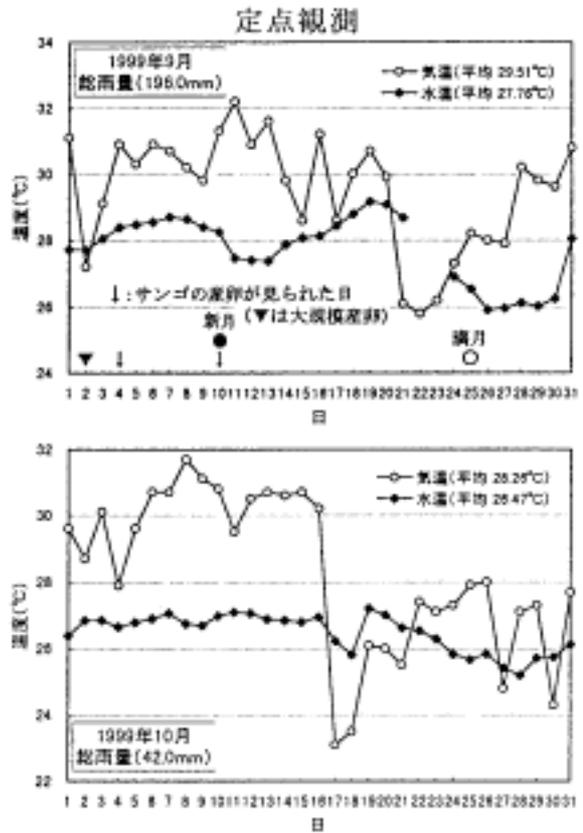
一番大きなグループはイザリウオの仲間で、10種が含まれます。このグループの特徴は、頭にトゲが一本のびていることで、そのトゲの先端には飾りがついています。このイザリウオの仲間は、砂地の海底や岩場の上にすんでいます。あまり動きません。じっとしたまま、このトゲを振り動かします。するとその先の飾りの部分がひらひらと動き、まるで小さな生き物のように見えます。やがて、その「小さな生き物」をねらって小魚が近づいてきます。さあ、小魚がその「小さな生き物」を食べようとした瞬間、そこはまさにイザリウオの口のすぐ前なのです。ふだんはおっとりしたイザリウオも、このときばかりは目にもとまらぬ速さで口を開き、小魚を丸のみにしてしまいます(ちなみに、その速さは1000分の6秒だそうです)。

イザリウオの名前の由来には、2つの説があります。1つは、先ほど述べたエサの

捕り方に関係していて、あのよう漁をする、つまり「いざる=漁る」からきたという説。そしてもう一つはこの魚が、「体を引きずるようにして海底を歩く・いざる」からきたというものです。はじめに述べたように、多くの魚は泳いで移動しますが、イザリウオの仲間は、「歩いて」移動することが多いのです。カサゴやオコゼの中にも歩くように移動できるものはいないではありませんが、イザリウオのように立派な足のような胸ビレをもつものは、ほかにありません。その姿から、英語ではフロッグフィッシュ(カエルのような魚)と呼ばれています(ちなみに日本でカエルウオといったら別の魚を指します)。

さて、最後にもう1つのグループ、ハナオコゼについて書いておきます。ハナオコゼの胸ビレは、イザリウオのような「足」というよりも、むしろ「手」のようで、かなり細いものでもつかむことができます。この手をいかし、ハナオコゼは、他のイザリウオ科の仲間たちと違って、海底ではなく、海をただよう流れ藻などにつかまって生活しています。大きな海の中に浮かぶこうした漂流物は、小魚たちが身を寄せるオアシスのような場所なので、それらをエサにするハナオコゼにとっては、ちょうど良いすみかなのです。このように、小魚たちの方から寄ってくるためでしょうか、ハナオコゼには、イザリウオのような飾りのついたトゲはありません。

今、研究所にはこのハナオコゼが一匹くらしています。キビナゴを目の前で動かしてやるとパクリとひと飲みにしては、すくすくと大きくなっています。みなさんも、一度この不細工だけれど愛きょうたっぷりの、不思議な魚を見てみてください。



#### 阿嘉島の海より

-リーフチェック 99 座間味村-

リーフチェック 99 座間味村には 14 名のボランティア・ダイバーが参加し、9月28日に座間味島の新田浜で、9月29日には阿嘉島のニシハマで調査を行いました。参加者のみなさん、お疲れさまでした。調査の結果、新田浜のサンゴ被度(底質に占める生きたサンゴの割合)は水深3mで36.9%(昨年52.5%)、水深11mで48.1%(昨年63.1%)と、2水深とも昨年より約15%低下していました。これは、昨年起きた白化によるサンゴの死亡と、9月22日に直撃した台風18号による攪乱が主な原因と考えられます。今年の調査では白化したサンゴは見られませんでした。群体の一部が死んだサンゴが見られたことが心配されます。リーフチェックは村を挙げた行事として毎年行いますので、来年はより多くの参加があることを期待します。